

## 要旨

### 鉄道の『シスター・キャリー』、前進のトラック、循環のループ

秋山 義典

本論ではシオドア・ドライサー『シスター・キャリー』(1900)の中で鉄道がどのように利用されているのかに注目した。米国の鉄道とは20世紀に入る前後の時期に重要な役割を担っていた。それは社会の発展とともに人々を期待させ、希望を与える可能性にあふれていた。キャリーは鉄道を使ってシカゴに向かった。ハーストウッドはキャリーと共にシカゴからニューヨークに向かった。キャリーとハーストウッドは鉄道の移動の中で二人の関係を展開させていく。ニューヨークで新生活を始めた男女は、異なる人生の軌跡をたどる運命を迎える。キャリーはブロードウェイの女優に前進した。一方ハーストウッドは自己の行き先を見失う。両者の違いはキャリーが軌道の上を前進していくがハーストウッドは都市空間を走る循環の軌道に入り込んだ。彼は前進できずに同じ場所を行き来するばかりである。結果的に、鉄道の軌道が二人の運命を分ける結果につながっている。

## Abstract

### *Sister Carrie* on Railroads, Tracks of Progress, Loops of Circulation

Yoshinori AKIYAMA

This paper focused on how railroads are used in Theodore Dreiser's *Sister Carrie* (1900). The railroads in the United States played an important role in the period around the beginning of the 20th century. They had the potential to give people hope and promise as the society developed. Carrie took the train to Chicago. Hurstwood went with Carrie from Chicago to New York. Carrie and Hurstwood developed their relationship during the train ride. As the man and woman began their new lives in New York, they were destined to follow different life trajectories. Carrie moved on to become a Broadway actress. Hurstwood, on the other hand, lost sight of where he was going. In conclusion, the difference between the two people was that Carrie moved forward on a track, while Hurstwood entered a circular track that run through urban space. He could not move forward and had to stay in the circular trajectory and just kept going back and forth in the same place. The railroad's trajectory led to the result that the two men's fates were divided.

# 鉄道の『シスター・キャリー』、 前進のトラック、循環のループ

秋山 義典

## 1. 前進する『シスター・キャリー』

シオドア・ドライサー『シスター・キャリー』(1900)のキャリーは、最終章でロックキングチェアにひとりで座っている。キャリーには、「ああ、キャリー、キャリーよ、前進せよ、前進せよ」の掛け声が聞こえてくる。ブロードウェイの劇場の通りを高給取りのスター女優になりあがっていくその物語の結末をむかえても、揺れ動く椅子に座ったキャリーの背後から、「前進せよ、前進せよ (Onward, onward)」の台詞が号令のように響きわたる。「前進せよ」のイメージは、食べていくのがやっとの靴工場の女工から、最後にニューヨークで個人的に大勝利を勝ちとるところまで、人生を上りつめたキャリーの歩みを象徴的にあらわしているとも言える。そしてさらに、ブロードウェイのスター女優の道を突き進む期待もふくらむ。そこに加えて、この小説後半に登場する電気技師エイムズも、キャリーに演劇の道をさらに「一歩、前に進む」ように励ましている。<sup>1</sup>

その上鉄道が「前進する」もう一つのイメージに重なり合っているように思われる。「Carrie」と呼ばれる名前にも、停車することのない走り続ける特急列車のような動きが感じられる。本論文では、目的地にむかって走り続ける「鉄道」のイメージがどのように展開しているのか、人生がひとりの成功者と敗北者をつくりあげるとまったく同じように、その「鉄道」のモデルを浮き彫りに出して、物語の検討を試みたい。<sup>2</sup>

## 2. 架空の町「コロンビア・シティ」

ドライサーの『シスター・キャリー』(1900)の最初の部分は、キャリーが列車に乗ってシカゴに向かう場面である。小さなトランクに安物の手提げバッグ、紙袋に入れた弁当とシカゴに住む姉ミニの住所の紙切れといった身軽な恰好が特徴である。着の身着のまま、家を出ていくかのようなのである。母親から別れのキスもらっ

て涙を見せるが、不安や後悔の念を抱きながらも、父親から別れの言葉も励ましの言葉もないまま、両親との別れの場面であるにもかかわらず、実にあっさりして、こみ上げるような感動が、第1章で描かれるのかと思いつつも、その期待は打ち砕かれる。<sup>3</sup>

キャリアがこの鉄道に乗ったのが、1889年の8月だった。その町には、「コロンビア・シティ」という、どこにでもありそうな名前がつけられている。そもそもその地名は、実在するのだろうか。この町の名前は、架空の名称が使われているとテキストの注釈に記載される。ペンシルバニア大学出版局版の注釈には「ウィスコンシン州にはコロンビア・シティは存在しないが、ドライザーがシカゴに出てくる以前はインディアナ州ウォーソーにいた。そこから20マイル西に実在したのがコロンビア・シティである」と書かれている。<sup>4</sup>この作品を書き下している時期にドライザーは、インディアナ州に住んでいた経験から「コロンビア・シティ」という地名を思い起こしたであろう。そういう理由から、この地名が推測されているのが透けてみえる。

では、ドライザーは、どうして、ウィスコンシン州の田舎町にキャリアの故郷を設定したのであるだろうか。インディアナ州から列車に乗って、シカゴに向かうことも可能であるはずなのに、キャリアは、ウィスコンシン州の故郷を出発している。この物語のなかで、それはたとえば、架空の町であっても、鉄道が敷かれているのが、設定された環境である。そのように想定するのは的外れとはいえないだろう。鉄道が敷かれていなければ、キャリアは故郷から移動することができない。鉄道が走る町として、架空の「コロンビア・シティ」がウィスコンシンの田舎町に設置されたのではないだろうか。たとえば架空の名前であっても、彼女は駅に行き、家族と別れる。駅には線路が敷かれて、列車が停車する。「コロンビア・シティ」を出た鉄道は次の駅に向かって進行する。次の駅はさらに先の場所につながっている。ある意味で、鉄道は知らず知らずのうちに人を未知なる場所に連れていく。キャリアは「たとえシカゴで暮らすことになっても、コロンビア・シティはそう遠くない。数時間——2、3百マイル (a few hundred miles) の旅なんか、大したことはない」(1)と呟く。キャリアが「大したことはない」程度に鉄道網がすでに浸透しているのだろうか。

### 3. キャリーは「2、3百マイルは大したことはない」といった。

広大な平野の中を走るキャリアを乗せた鉄道は、米国鉄道史の一部をかいま見せる。米国中西部を網羅する特にインディアナ、イリノイ州、ウィスコンシン州の中西部には、米国の鉄道ネットワーク化の開発の起源がある。

中西部の鉄道網についてその歴史を振り返ると、1852年、シカゴとニューヨークを結ぶ鉄道路線が開通する。運河に代わり、鉄道が主役になる時代の始まりである。この間、南北戦争があったが、鉄道建設は進行し、西部で積極的な鉄道建設が行われ、1869年には、シカゴとサンフランシスコを結ぶ大陸横断鉄道が開通している。19世紀後半にみられた経済の発展とともに長距離の貨物列車が、米国大陸を横断するようになり、鉄道ネットワークが拡大した時期に重なり合う。<sup>5</sup>

イリノイ州シカゴとウィスコンシン州のミルウォーキーの間であれば、鉄道が走る光景を思い浮かべるのは、難しいわけではない。特にミルウォーキーは当州中では大都市である。ミルウォーキーであれば、鉄道でシカゴと結ばれているのも自然な記述であろう。<sup>6</sup>

とは言っても、シカゴとミルウォーキーの間は80マイル程度の距離であり、キャリアがいうのは「数百マイル (a few hundred miles)」程度である。80マイルは「大した距離」ではないというのは確かである。シカゴのあるイリノイ州とウィスコンシン州は北から南へとつながる隣り合う関係にある二つの州である。「a few hundred miles」とは、シカゴから北に向かうと、ウィスコンシン州のどこのあたりに相当するかと考えると、シカゴの北、ミシガン湖に沿って207マイルで「グリーンベイ」までに相当する。または北西部に進むと、シカゴから317マイルで「オークレア」まで行くことができる。たしかにシカゴからの距離は推測できるが、このような遠くまで鉄道が走っているのだろうか。1900年発表の『シスター・キャリア』の以前にウィスコンシン州の奥地まで走る鉄道が敷かれていたのだろうか。

当時の路線図をみるとシカゴ以北のウィスコンシン州の奥地が鉄道路線でつながっているのがわかる。キャリアが列車に乗ったと推測できる2—300マイルの距離のある北西部、北部にも鉄道が敷かれているのがわかる。

19世紀後半の中西部の鉄道路線図によると、シカゴ北西部の方向に、鉄道路線が見られる。ウィスコンシン州の鉄道を考察するときに、忘れてならない鉄道の歴史として「ミルウォーキー鉄道」がある。それはのちの時代にシカゴ周辺から西海岸のタコマまでの大陸横断鉄道路線で、17000キロを超える路線網をもつ大手鉄道会社に成長した。<sup>7</sup>

#### 4. 列車は「コロンビア・シティ」の後、「ウォーキショー」駅に停車した。

この「ミルウォーキー鉄道」の前身、ミルウォーキー・アンド・ウォーキショー鉄道がミルウォーキーとミシシッピ川との間を結ぶ路線の免許を受けたのが1847年。この鉄道の最初の路線がミルウォーキーから8キロの西、ウォーワトサマ

で 1850 年に開通している。そしてさらに 51 年には南西方向のウォーキショー (Waukesha) まで延長されたのだった。「ウォーキショー」とは、『シスター・キャリー』の中では、「コロンビア・シティ」の次に続く鉄道の駅に登場する。彼女の乗車駅「コロンビア・シティ」の架空の土地とは、反対に実名で使われている。それには、米国鉄道史の視点からみて、大いに理由があると思われる。

そしてこの駅がこの小説の中に登場する。当時一番流行のビジネススーツで、全国を営業で回るセールスマン、チャールズ・ドルーエがキャリーに語り掛けようとしているのである。チャールズは、キャリーにつぎのようにこの土地の宣伝をするように語り掛ける。

That is one of the prettiest little resorts in Wisconsin.---The train was just pulling out of Waukesha.....that is a great resort for Chicago people. The hotels are swell. You are not familiar with this part of the country, are you?(2)

このウォーキショーの町は、ウィスコンシンの中で一番きれいなリゾート地です。列車はちょうどウォーキショーから出てきたところ。シカゴの人々にすばらしいリゾート地になっています。ホテルもすばらしいです。ご存じないのですか。

「コロンビア・シティ」は、架空の町であったが、鉄道に揺られながら、目的地シカゴに向かう場面で、列車が、徐々に終着駅に向かって動いている感覚が読者に伝えられていくが、そこに実在する土地の名前が取り上げられる。「ウォーキショー」が実在の名前であるその理由は何だろうか。それはウォーキショーが、「コロンビア・シティ」から相当な距離があり、その長距離を列車が走り続けたからなのか。それなりの意味のある土地であると見られている。キャリーは、「コロンビア・シティ」に住んでいたのも、停車駅のことなど知るわけがないと答えている。<sup>8</sup>

ペンシルヴェニア版では「ミルウォーキーから西に 16 マイルの町で、シカゴの北およそ 50 マイルにあり、ウォーキショーの天然鉱水が有名。ホワイト・ロック水など瓶入りのミネラルウォーターがこの土地から出荷されている」と書かれている。<sup>9</sup>この注釈からコロンビア・シティからかなりの距離を走ってきている様子がわかる。その距離感を示す鉄道のリアルな地理的な位置がじかに伝えられる。「シカゴの北およそ 50 マイル」とは、彼女の故郷から 200 マイル近く離れて、鉄道は、かなり目的地に近づいている。その土地がミネラルウォーターの産地である点も、シカゴの富裕層がこのウォーキショーの原産にこだわり、この土地の水を買い求めたといわれている。<sup>10</sup>

## 5.Carrie-「鉄道が走る」意味

『シスター・キャリー』では、故郷のコロンビア・シティを列車が、速度を上げて走っていくと、「列車はウォーキショーの駅を出発しようとしていた (The train was just pulling out of Waukesha)」(2)。次の駅で降りようと、引き返そうと思えば、いつでもできるとキャリーは考えながら、列車はさらに遠くに進んでいた。

鉄道には出発駅(出発点)があり、途中にいくつの停車駅があり、やがて終着駅にたどり着く。言い換えると、鉄道には始まりがあり、真ん中があり、そこに終わりがある。さらに言えば、始まりの期待は、いつか終着点という期待の実現を迎える。鉄道は、始まりを提供する。わたしたちはその始まりを意識しないときでも、動き出した鉄道によって始まりの期待が生まれるかもしれない。その始まりは、やがてそこから離れて、別の場所に移動する。それが目的地である。出発点では見えないものが、徐々に前進していくと、車窓の外の風景と共に変化して見える。最初には、見えない目的地が徐々に、その姿をみせていく移動の時間も、鉄道がもたらす変化の力であろう。鉄道で行く線路の向こうには、なにか希望を抱かせるものがあるかもしれない。したがって鉄道は、未知なる新世界へのあこがれや望みにつないでいく。始発駅にはなかったものが、いつか終わる終着点には、発見できることもある。もちろん、その逆もあるだろう。鉄道が走るとは、そういう期待とあこがれ(あるいは絶望)を包括するようなメッセージである。だから鉄道に乗れないというのは、人生になにか期待をもてないのかもしれない。そうした暗示を感じ取れるのではないだろうか。逆にひとは鉄道に乗る限り、その先になにか目的を持つことができる。その先に向かって前進すれば、ひとはさらに生きることができる、そういう期待が生まれるかもしれない。『シスター・キャリー』のなかで、「鉄道が走る」とはそういう象徴的なメッセージを伝えているのかもしれない。

To be sure there was always the next station, where one might descend and return. There was the great city, bound more closely by these very trains which came up daily. Columbia City was not so very far away, even once she was in Chicago. What, pray, is a few hours—a few hundred miles? She looked at the little slip bearing her sister's address and wondered. She gazed at the green landscape, now passing in swift review, until her swifter thoughts replaced its impression with vague conjectures of what Chicago might be. (1)

必ず次の駅があり、そこから降りて戻れる。そこには大都會があり、毎日のように走ってくる列車によって密接につながっていた。シカゴにいたとしても、コロンビア・シティはそう遠くはなかった。数時間、数百マイルが何になるのだろう？ 姉の住所が書かれた小さな伝票を見て、キャリアは不思議に思った。彼女は緑の風景を見つめて、今では素早く風景が通り過ぎていき、その印象がシカゴとは、単にどんなところなのかという漠然とした推測に変わっていた。

「コロンビア・シティ」のキャリアは、ある意味で無垢であり、無知でもあった。自分の目的地には漠然としたイメージしか持てなかったにもかかわらず、鉄道に乗ることで、徐々に自分の目的地が見えてくる。するとあこがれのシカゴで、「姉の住所」に向かうという目標が、より具体的に考えられるようになっていく。シカゴに到着するまで「みどり」で覆われた田舎の風景を見ながら、しかし徐々に、車窓の風景が、都市の景観に近づいていく。キャリアは、田舎の「みどり」から大都市の風景に変わりつつあるのを目撃する。コロンビア・シティを出発した鉄道は、空間の壁を越えて「前へ、前へ」走る。

## 6. 荒野から都市に「鉄道」は走る

もともとは、自然に覆われたどこまでも続くむき出しの平野だったシカゴが、鉄道線路と共にその姿を塗り替えていく。鉄道の電柱が次々とたてられて、今までにない線路が敷かれるようになった。その上に鉄道が走る。人々が移動する。ヴォルフガング・シベルブシュは、ヨーロッパの鉄道と比較しながら、米国の鉄道が、広野や原始林の中に敷設された点を特徴とした上で「荒野を文明化して経済的に利用するために開拓するには、まずは何より、効果的な輸送機関が必要だったのである」と米国の産業革命の特徴に鉄道の役割を強調している。<sup>11</sup> 「鉄道会社」は無秩序な原野の区画整理を行いながら、都市を開発する。都市開発の大きな割合は、「鉄道」によって支えられているようだ。鉄道による成長しつつある社会の様子がうかがえる。そこからまたこの街の拡大傾向を予感できる。しかしすこし前の19世紀初期まで、時間を戻せば、何もない空間であった。この都市の少し手前には、濃い緑の木々が生い茂る原野や平原が、延々とつづいている。人の姿など見えない、建物もない、むき出しの土地がひろがるばかりの無秩序な大自然。まさになにもない無残な光景である。大草原は、まさに陸の大洋とみなされている。野生の動物が走りまわり、ネイティブアメリカンの襲撃をおそれながら、人々は移動していたのだ。アメリカ社会の進歩とは、まさに鉄道の開発の歴史である。<sup>12</sup>

実際 1890 年のシカゴとは、前代未聞の急成長を見せているといわれた。<sup>13</sup>人口は 100 万を超えて、街には目新しい建築物が次々と建てられていた。「若い娘たちもこのように胸躍る旅に出てやってくるのは、ムリもないと思えるような都市だった」といわれる。このような都市が拡大しているなかで大きな影響を与えているのが、「鉄道」の発展であると強調されている。鉄道会社によって都市が開発されている。第 2 章で次のように語られている。「この地域の将来性を認識していた巨大な鉄道会社は、ずっと前から、移転や輸送のために広大な土地を押収していた。急速な成長を見越して、路面電車の線路ははるかに広い田園地帯にまで伸びていた」(12)。鉄道は将来の社会を新しく変革する文化的な象徴であり、新しい路線を建設して、その田園風景を変えようとしている。鉄道環境を守る街灯が整備されて、街中では、路面電車の線路が現在の都市の境界線を越えて、郊外に伸長している。まさに鉄道はシカゴの経済成長の重要な源泉になっている。たとえば仕事を探すキャリアに、姉の亭主ハンソンが「ここは大きな街だから、2、3 日すればどこかに、潜り込めるはずだ、みんなそうしている」とほのめかす(9)。鉄道は、一見、遮るものがなく平坦な大平原に電柱を立てることで、平坦な空間に秩序をあたえているように見える。「鉄道」は、無秩序な世界を都市に変えていく。さらに「鉄道」の線路が、広大な原野に敷かれていく。その線路の上に商品が流通して、その商品を鉄道に乗って移動する。その商品を売り込む仕事も登場する。このような鉄道の発展によって生まれた職業をもつ登場人物がいる。

それは、チャールズ・ドルーエである。かれは「drummer」と呼ばれるセールスマンである。「製造会社に雇われた販売促進外交員」という意味であった。工業化時代の経済社会のなかで、商品が生産されて、都市に輸送されていく社会にかわりつつあった。そこに大陸を移動するセールスマンの仕事に注目が集まる。鉄道の発展とともに都市から都市へと旅をしながら、商品を売るセールスマンである。商品の経済や流通の商品文化を体現している。ドルーエは旅慣れていて、世間慣れした、あか抜けた目新しいスーツを着ていた。そういう人物は「masher」といわれる。その柔らかな物腰からキャリアの関心を引くようになる。今までになかった時代を象徴するような魅力の持ち主である。「彼が財布を出している間、キャリアはそれを見ていた。そして、コートのポケットに入っていた束からお札を取り出した」(6)。ドルーエのようなセールスマンには、移動のために「鉄道」の存在は不可欠であり、かれにとっては、鉄道がなければ、ビジネスは成立しない。「鉄道」とは、ドルーエのような人物に形を与えているといえるのではないだろう。この男は、産業や社会の拡張期で商品文化による物流が盛んになる時期における「典型的人物」といわれるが、それは、まさに「鉄道」のような公共交通がひとにスタイルを与えている



のだろう。かれは「茶の格子縞のウール仕立てのスーツを着ていた」。そのスタイルこそ、混とんとした米国の原野に社会のなかの類型を付与している。その社会のなかの類型とは、未知なる原野のなかの新しい「秩序」というべきものである。おそらくドルーエは、最初から目新しいスーツを着込んで、女性のこころを引く「伊達男」だったわけではない。「鉄道」がなければ、こんな「drummer」のような存在はうまれなかったであろう。同時にチャールズにとって「鉄道」とは、まさに日常の世界を意味する。シカゴ行の鉄道のなかで、チャールズが初めてシカゴに向かう乗り物の中でキャリアに出会うのも、ありきたりの日常ビジネスの一部でしかないといえるだろう。

一方チャールズに出会ったキャリアには「鉄道」の存在とは、出会ったばかりの珍しい「非日常」を暗示しているかもしれない。穏やかな性格で、おとなしい受け身の女性がひとりで故郷を離れて、世間の荒波に入り込んでいく。全くの他人であるドルーエの物腰柔らかな姿勢についつい、姉のシカゴの住所を教えてしまう。たとえば、キャリアのような女性は、ヘンリー・ジェームズの『ある婦人の肖像』(1881)に出てくるイザベル・アーチャーのような人物とは対照的である。積極的に前向きなイザベルのような女性ではない。鉄道の車窓から徐々に変化していく周囲の風景を見ながら、徐々にシカゴの街中に列車が入っていったとき、彼女は「一種の恐怖をおぼえて心が落ち着かなかった」ほど臆病だったし、車中にいた彼女の心には「非日常」的な光景が映し出されたにちがいない。同時にキャリアは、こうした落ち着きのない気持ちに押し流されている。それにもかかわらず、田舎のコロンビア・シティにも戻る気持ちにはなれなかった。「想像力豊かな子どもや、全然旅したことのない人にとっては、はじめて大都会に入っていくのは不思議な経験」だからである。すると車窓を不安そうに、眺めていたキャリアの様子が、その思い悩むような姿から、徐々にその姿を修正するようになってくる。アメリカの大草原の自然から大都市の電信柱が見え始めると、今度は無数の看板が次々あらわれて、その転調していく車窓に「夢中になっている」もう一人のキャリアがいる場面を、旅慣れたチャールズ・ドルーエが見逃さずにとらえていた。夢中になったもうひとりの彼女を目撃したドルーエは「何ごとにもいかに伝染しやすいものか」と思う。キャリアにとっての鉄道が投げかけたこの「非日常」的な恐怖が徐々に「夢中」なキャリアに転換させつつある。押し寄せる住宅の群れが彼女を圧倒する。車窓を通して見える大都市の光景が受け身でおとなしいキャリアを一新しようとしている。観察眼の鋭いセールスマン、チャールズは、彼女の関心を引くように、シカゴの名所を次々と説明し始めるのであった。

## 7. シカゴからモントリオールへ「鉄道」が走る

ハーストウッドは、シカゴの「フィッツジェラルド&モエ」の支配人を勤めていた。妻と子のある家庭をもち、危険な道は歩まず、抜け目なく、注意深い性格で、安定した人生を送っていた。ところが小説の後半では、ハーストウッドは、ガラリと姿を変える。かれは、シカゴの名店「フィッツジェラルド&モエ」の金庫から、思わず現金を横領してしまう。しかし、その行為の後に、バーの支配人だったハーストウッドが、意表を突くような「鉄道」利用の才人であることがわかる。多額の現金を手にしたかれが次に考えることは何か。シカゴから逃げ出すことであった。そのために「鉄道」を利用する。かれは結婚していることをキャリアに隠して、彼女との新境地をひらく人生を、見たこともない土地で再開する挑戦に挑んでいる。それにもかかわらず、その本音に気が付いたキャリアはハーストウッドと別れる決心をする。それでもキャリアとの人生をあきらめきれないハーストウッドは、キャリアをなんとかおびき寄せようと策を練る。それは、キャリアを「鉄道」に乗せて、シカゴに後戻りさせないようにする計画であった。「ドルーエが怪我した」という作り話を、彼女に信じ込ませることであった。そのために「ここから遠いサウスサイドなんだ。鉄道に乗らないといけない。それが一番早い」という「鉄道」を使ってまことしやかなストーリーをでっち上げて信じ込ませる。ハーストウッドの作り話に乗せられたままに、うかつにもキャリアは「鉄道」に飛び乗ってしまう。では走り出した列車はどこに向かうのか。

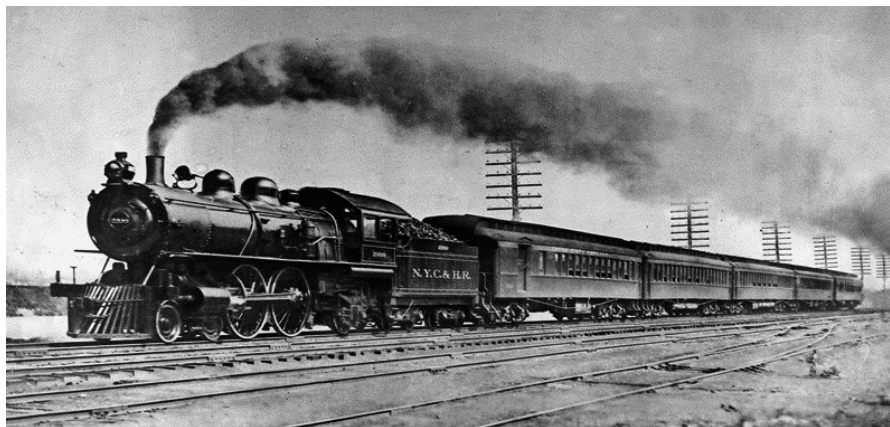
いち早くシカゴから逃げ出そうするハーストウッドは、「鉄道は今、どんな風に動いているのだろうか (I wonder how the trains run?)」と呟く。次に何をするのか。かれは時計をとり出して、時間をみる。現在の時刻をさっと調べる。「一時半に近かった」。すると電話を置いている有名なコンビニエンスストアを探して、公衆電話のボックスを見つけて、電話でシカゴの駅に連絡をする。駅の電話番号を調べて、デトロイト行の発車時刻は、どうなっているのかを駅員に聞く。ハーストウッドが知らず知らずのうちに行ったこのような「鉄道」乗車手続きは、鉄道を不可欠とする現代人であれば別だが、そうでなければ、普通の人間には容易にはできないであろう。鉄道を使いこなしたことがある経験の有無がまずは問われる。鉄道の才人でなければ、この一連の手続きは、不可能であると思われる。さらに、ハーストウッドの「電車」的才能は続く。

さて駅員はこの落ち着いたのなさを全く見せないこの逃亡者に「時刻表」を開いて親切にも、列車の出発時刻を教える。「寝台車が連結されている列車はありません。しかし、ないわけではなく、3時発の郵便輸送列車があります」と駅員は答えると、

すかさず、「この列車はデトロイトに到着するのは何時になりますか」とハーストウッドは質問した。そこでかれの「鉄道」の時刻表が脳裏で鋭く働き始める。デトロイトに入って、その川を越えてカナダ側にわたってしまえば、モントリオールまで行ける時間と速度を計算して、正午前にモントリオールに入れば、逃亡中の自分が捕まるわけではないと判断している。

## 8. シカゴ、デトロイト、モントリオール、ニューヨーク間を鉄道で移動する『シスター・キャリー』

うっかり「鉄道」に乗ってしまったキャリーには、「目的地」がない。キャリーは客車に残される。ハーストウッドから、キャリーは「もう、あなたとは一切関係ありません。この列車から降りたいだけです。この列車はどこ行きなんですか (I'll not have anything to do with you. I want to get off this train. Where are we going?)」という (44)。「Where are we going?」ということだが、「目的地」をもたないまま走り続ける鉄道を暗示する。どこか知らないところに行く鉄道などありえないのである。だから「目的地」のない鉄道から下車して早く引き返したい。結局「目的地」のない鉄道のなかで移動している、彼女は、シカゴに戻りたいと主張する。ハーストウッドのつくり話を疑いもせず、結局鉄道に乗ってしまった自分の浅はかさを感じつつ、かれに怒りをぶつける。そもそもがこの鉄道に乗るきっかけになった当初の「目的地」であったドルーエが入院したシカゴのサウスサイド (病院) にいくはずだった。それが自分をおびき寄せる作り話だったのだから。



19 世紀後半、ニューヨーク・セントラル鉄道の蒸気機関車<sup>14</sup>

## 9. 転居への情熱

ハーストウッドに怒りをぶつける彼女は、列車から飛び降りようとしたのだろうか。ハーストウッドへの怒りもいつわりの「目的地」も彼女の意識のなかで変化が生じる。いつわりの「目的地」へのこだわりはどこかに消えていく。キャリアは、「シカゴがどんどん遠のいていく。遠くの見知らぬところへ運ばれているのだ。この汽車はどこか遠くの都会まで、ほとんど停まらずに走っているのだ」と感じとることができた。ドルーエの事故のために「鉄道」に乗ったはずなのに、男にだまされたキャリアは、この目的の実体を見失っている。どこに向かっているのか不明なまま、車両の無時間的な空間が、継続しているのを、彼女自身が暗に感じ取っている。「列車は夜を切り裂くように猛スピードで走り、より新しい世界へ突進する (the train swept on frantically through the shadow to a newer world)」(203)。「より新しい世界」とは、どういうことだろう。空虚な作り話のなかで、揺り動かされつつ、いまここではない斬新な世界に向かっているといえる。キャリアは「先に、先に」前進する。

To the untravelled, territory other than their own familiar heath is invariably fascinating. Next to love, it is the one thing which solaces and delights. Things new are too important to be neglected, and mind, which is a mere reflection of sensory impressions, succumbs to the flood of objects. Thus lovers are forgotten, sorrows laid aside, death hidden from view. There is a world of accumulated feeling back of the trite dramatic expression—“I am going away.”(203)

旅行をしたことのない人にとって、慣れ親しんだ土地以外の領域は常に魅力的なものである。それは愛に次いで、慰めと喜びを与えてくれるものである。新しいものは無視できないほど重要であり、感覚的な印象を反映したものに過ぎない心は、物の洪水に屈してしまう。このようにして、恋人たちは忘れ去られ、悲しみは脇に置かれ、死は視界から隠される。「わたしは遠くに行く」という陳腐でドラマチックな表現の裏には、蓄積された感情の世界がある。

だまされながらも、途中で列車から降りることもできたはずであったが、キャリアは、「新しいもの」に対する好奇心を抑えるための解決策など思い浮かばない。これまでシカゴしか知らない女性がそれ以外の場所を知り、過去をすべて忘れて、「慣れ親しんだ土地」から離れていく。鉄道が「慣れ親しんだ土地」から「新しい世界」に導く。それは新たな「目的地」にキャリアを連れ出そうしている。

As Carrie looked out upon the flying scenery she almost forgot that she had been tricked into this long journey against her will and that she was without the necessary apparel for travelling. She quite forgot Hurstwood's presence at times, and looked away to homely farmhouses and cosey cottages in villages with wondering eyes. It was an interesting world to her. Her life had just begun. She did not feel herself defeated at all. Neither was she blasted in hope. (203-204)

キャリーは車窓を飛び去る景色を眺めながら、自分の意志に反して騙されてこの長い旅に出たことや、旅に必要な服を着ていないことをほとんど忘れていた。時折、ハーストウッドの存在を忘れてしまい、不思議そうな目で村の中の家庭的な農家や瀟洒なコテージを眺めていた。それは彼女にとって興味深い世界であり、彼女の人生は始まったばかり。彼女は自分が敗北しているとは全く感じていなかった。期待に胸がふくらんでいたわけでもない。

車窓の風景とは不思議である。それは人の気持ちをいかに塗り替えていくのだろうか。シベルプシュは、車窓からみた風景についてヨーロッパの鉄道旅行者とアメリカの旅行者とのちがいを述べている。ヨーロッパの車内では、退屈さや単調さから由来する疲れや精神的な病の由来などが指摘されている。一方で読書行為などの文化活動も促進することになったが、ヨーロッパの訪問者は大きな反応を示さなかった。しかし、19世紀の米国人には「転居への情熱」が、米国の商業と技術に見られる一般的な力動性に当てはまるばかりか、車窓の世界が米国人の身体の動きに重ね合わせて特別なものとして考えられると指摘する。<sup>15</sup>その動きから、キャリーが車内でどういう風に過ごしていたのかを見ると、その活発な表情や身体の動きから推測するのは難しくない。アメリカ人にとって、「鉄道」の車窓であるにせよ、それは疲れを増幅させる病でもなければ、睡眠を助長させる病理にもつながることのない、「慰めや喜び」をあたえてくれる特別なものかもしれない。未知なる土地に結びついて、ここではないどこかに連結しているのである。加えてそれは、あこがれも運んでくるようだ。ようやくわたしたちは、車窓が「新しい世界」とつながっているのを発見する。

## 10. 鉄道の「目的地」、空間のニューヨーク

行き先も曖昧なままシカゴを出て、デトロイトを経て、モントリオールで一度鉄道を降りたキャリーとハーストウッドであるが、その鉄道の距離のなかで、キャリー

とハーストウッドの関係も劇的に変化が生じる。彼女はハーストウッドを一途に思うような愛情がないと告げる。結婚というあこがれを、どこかに捨てきれずにいたが、自分は自分の意思でこの男をさっさと捨てることもできる。つい最近までハーストウッドがいない人生に言いようのない不安を募らせていたが、その不安だった気持ちも徐々に自分に対する自信に活路を見出し、「鉄道」によって、その先の精神的な成長への期待に胸がおどる。ヨーロッパの旅行者とは異なり、「鉄道」による精神的なトラウマがキャリアに与えられるというのではなく、「自分は敗北していない」という力強い期待の光を見出すことができる。

さて、小説の後半、キャリアとハーストウッドがニューヨークで住まいを探している。「アムステルダム街近くの七十八丁目に適当な物件を見つける」。そのアパートは建物の3階にある。「一列に連なった部屋が6室」もあるアパートである。この場所には「鉄道」の象徴的な空間が暗示される。それは「鉄道フラット」とも呼ばれる。

キャリアは、移動することはできないが、「鉄道フラット」のなかで生活を開始する。それは連結した客車が前進するかのようなアパートの中で日常生活が進行する。ニューヨークの中にも鉄道が走り続けているかのようなのである。アパートの玄関には「G・W・Wheeler」という偽名の表札が郵便ポストに張り付けられている。Wheeler とは「車輪の付いた乗り物」も意味する。「鉄道フラット」は日々の生活を支えるような「鉄道」的な象徴でもある。

## 11. ハーストウッド、「鉄道」を動かす

『シスター・キャリア』における鉄道の旅は、最終場面に向かう。町の中は失業者であふれていた。ハーストウッドとキャリアのニューヨーク生活も3年が過ぎるが、定職をもたないまま、経済的に追い詰められていくハーストウッドは、人生の下り坂を迎えているにもかかわらず、その現実に向き合う気概がない。女優の仕事を探して働き始めるキャリアとは、対照的である。新聞を見ているハーストウッドは、ブルックリンの市内鉄道が車掌と運転手を募集しているのを知る。労働者のストライキが発生した。そのために、人手が突然無くなったからであった。ハーストウッドは、自分がキャリアの働いた給料をこっそり盗み取っているのではないかと疑いの目でみられていたので、ついに追い込まれたかれは必死に仕事を探しているところだった。この鉄道会社では運転手のストなどで路面電車全線の労働者が職場放棄をして、3名で運営していたほど、路面電車を動かす運転者が絶対的に不足していた。すると鉄道会社が働き手を探し求めてハーストウッドを雇い、路面電

車の運転を指導することになった。かつての酒場の支配人だった男は、路面電車の指導員からハンドルの動かし方を必死に学んでいる。

“Now, this handle here regulates your speed. To here,” he said, pointing with his finger, “gives you about four miles an hour. This is eight. When it’s full on, you make about fourteen miles an hour.”

Hurstwood watched him calmly. He had seen motormen work before. He knew just about how they did it, and was sure he could do as well, with a very little practice.

The instructor explained a few more details, and then said:

“Now, we’ll back her up.”

Hurstwood stood placidly by, while the car rolled back into the yard. (302)

「このハンドルが速度を調節して。ここまでは」と彼は指で指しながら言った。「時速約4マイル。これが8マイル。全開にしたら時速14マイルだ」

ハーストウッドは冷静に彼を見ていた。彼は以前にも運転手の仕事を見たことがあった。彼らがどうやって仕事をしているのかはよく知っていたし、自分も少し練習すればできると確信していた。

教官はもう少し詳しく説明してから、こう言った。

「さあ、車体をバックさせて」と言った。

ハーストウッドは、車が車庫に戻ってくる間、静かに傍らに立っていた。

この会話の中で、ハーストウッドは、鉄道の操縦をよく観察していて、なんとか路面電車を運転しようとする様子が見てとれる。

もと酒場のマネージャーだった人間が鉄道のハンドルを操作するところは興味をかきたてられるが、同時にニューヨークのブルックリンにおけるストライキが発生したことからも、分かるように、多くの失業者が街に集まり、暴動も数多く発生した。新聞では負傷者が4名出ていた。電車の窓が割られて、運転手が車外に引きずりだされていた。<sup>16</sup>本来、社会のインフラとして、都市の交通を守る役割の「鉄道」がストップしたのだ。人々は「鉄道」を使わずに、市内を歩いて移動した。こんな混乱した暴動の街中を、路面電車でするくらい危険と隣り合わせの仕事はない。それでも運転手の仕事に固執しなければ、食べるものも買えないくらい生活は困窮していた。ハーストウッドは、鉄道の操縦練習を終えると車庫の中に入って昼食のパンにかじりつくのだ。

There was no ceremony about dining. He swallowed and looked about, contemplating the dull, homely labour of the thing. It was disagreeable--miserably disagreeable--in all its phases. Not because it was bitter, but because it was hard. It would be hard to anyone, he thought. (303)

食事には作法などはない。彼は飲み込んで周りを見回し、退屈で家庭内の地味な労働と考えていた。それは不愉快だった -- ひどく不愉快だった -- すべての段階で。苦痛からではなく、辛いからだ。それは誰にとっても辛いことだろう、と彼は思った。



1899年の「ブルックリン・シティ鉄道」の路面電車<sup>17</sup>

この後、運転手として、ニューヨークの街中を走ったとき、大勢の労働者から「スト破り野郎」とののしられた。運転席には石が投げ込まれて、車内から引きずりだされていた。鉄道によって保たれていたはずの日常が破綻した。実際の写真の中にあるように、暴徒たちの襲撃に備えて、警官が路面電車に乗り込んでいた。運転手たちがストライキを起こして、次々と辞職。命の危険と隣り合わせの仕事でもあったにちがいない。

## 12. ループの円環—ブルックリン・シティ鉄道とガス栓

本来「鉄道」とは始発駅があり、そこから終点に向かう。ハーストウッドは、自ら、



「時刻表」を基礎にシカゴを出て、デトロイト、モンリオールを経て、ニューヨークに到着した。鉄道は先に先に、歩を進めていく。ハーストウッドは、ニューヨークの「目的地」から、「鉄道」を乗り換えた。「ブルックリン・シティ鉄道」に乗り換えた。路面電車の運転手になったのである。この路面電車には「終着駅」はありうるのだろうか。この電車は、シカゴーニューヨーク間、都市と都市をつなぐ都市間を走る「鉄道」と対比される。ミシガン・セントラル鉄道あるいはニューヨーク・セントラル鉄道は、都市と都市、地方と地方をつなぐことで、異なる土地と土地をつなぎ、その間を走行する。路線が先へ先へと広がりながら、ここニューヨークまでは、鉄道は、前進拡大している。前進拡大に対して、この「ブルックリン・シティ鉄道」は都市空間を循環する線路 (a series of tracks and loops) を走る。ハーストウッドは、路面電車の循環路線を午前「3回」、午後「2回」と走りまわっている。この円形のなかを循環する都市空間を走行するトラックの上を路面電車が走る。残念ながらこれは革新的な世界につながる未知なる目的地を期待できない。ハーストウッドには、路面電車の運転が、定型の時間で同じ線路を走る「退屈で家庭の中の地味な労働 (the dull, homely labour of the thing)」として、「不愉快」に感じられた。<sup>18</sup>かれこそシカゴを出てニューヨークまで時刻表を頼りに長距離の「鉄道」を乗り継いできた鉄道利用の達人である。どうしてこの男はそのように感じるのだろうか。ハーストウッドの違和感は、どこからやってくるのだろうか。それはおそらく、この「鉄道」がループのような線路の上を走行するからではないだろうか。このループ (a series of tracks and loops) の中を路面電車は、市内の中を循環している。<sup>19</sup>鉄道が街中を循環するとき、その動きは円形の起動を走行する。その円形のなかを反復することが「不愉快」の感情につながっているのではないだろうか。

この小説の語り手によれば、キャリアは終着に行きついたとしても、そのもっと先には別の目的があるという。ひとは果てしない追求を止めることはできないとのめかす。

Ames had pointed out a farther step, but on and on beyond that, if accomplished, would lie others for her. It was forever to be the pursuit of that radiance of delight which tints the distant hilltops of the world. (305)

エイムズはその先の一步を指摘したが、それが達成されれば、その先にも彼女のための別の一步が待っている。それは永遠に、世界の遠くの丘の上を彩る喜びの輝きを追求することだった。

エイムズから言われるまでもなく、作者ドライサーの視点から、キャリーは、いつまでも前進し続ける (Onward! Onward) 進歩のモデルとして描かれている。将来の成長を期待される鉄道会社が発展するのと同じように未来に向けて進んでいる。

Oh, Carrie, Carrie! Oh, blind strivings of the human heart! Onward onward, it saith, and where beauty leads, there it follows. (368)

ああ キャリー キャリー！人間の心の盲目的な努力！前へ前へ、と人間のころは、美しさが導くところには美しさがあると言うのだ。

鉄道はキャリーを前進させる。それは彼女にとっての成長を表している。一方、ハーストウッドは路面電車の円環ループのなかで、前進することができない。鉄道は、前進しているように見えるが、始発駅と終着駅を往復するその閉じた進行の中に、「鉄道」の未来が回収されてしまう。前進することが、先送りにされたまま、前進を止めたように見えるその後、ハーストウッドは、部屋に戻る。

It seemed as if he thought a while, for now he arose and turned the gas out, standing calmly in the blackness, hidden from view. After a few moments, in which he reviewed nothing, but merely hesitated, he turned the gas on again, but applied no match. (367)

それは彼がしばらく考えたかのように見えたが、今のところ、彼は立ち上がってガス栓を回した (turned)。闇の中に落ちて立って視界から隠されていた。しばらくして何も見直さず、ただ躊躇している間に、彼は振り返った。再びガス栓を回した (turned again) が、マッチをつけなかった (applied no match)。

ハーストウッドは「turned」の行動を2回繰り返す。Turnする動きを丁寧になぞってみると、円の動きを示している。この円を描く彼の手の動き方は、路面電車のループを思わせるイメージに微妙に重なり合う。栓を回す動きは、同じ動きを繰り返している。それは、「鉄道」の前進する動きと対立するように見える。あたかも円環する環のなかに運動しているかのようなのである。マッチを「つける」動きは、「鉄道」の前に向かう動きに似ているように見える。しかし、ハーストウッドの「鉄道」は、前進することは見せない。ぐるりと回転する円環ループのなかで、ハーストウッド

は自己の運命をひっそりと回収する決断を下す。最後は思わぬ展開を見せる。循環する路面鉄道は極めて暗示的である。路面鉄道に乗ることは、「鉄道」に乗らないのと同じ意味を持つ。夢や希望を持っていないのと同義でもあるのだ。

循環する環（ループ）とは、大きな視点から、後半の展開を考えたとき、シカゴのデパートや経済の動きもみえる循環のなかで、モノや紙幣が回転しているように見えるのも不思議ではないだろう。細部の循環を探ると、放浪癖のハーストウッドが仕事を探して街を巡回するそのハーストウッド的軌道もそれに近い運動を思わせる。毎日かれは、アパートから職業安定所をまわって戻ってくる。落ちぶれてしまい、薄汚れた服を着て、アパートメントの居間を「うろつく」彼の無意識の動きにも無縁ではないだろう。

フィリップ・フィッシャーは、キャリアはファーストネームで呼ばれるのに対して、ハーストウッドはラストネームで呼ばれる点に注目しているが、キャリアとハーストウッドの両者を合わせて一つのイメージとして『シスター・キャリア』を分析している。<sup>20</sup>この視点は直進するトラック（線路）と循環する環（ループ）のちがいに相当するだろう。「鉄道」をめぐるこうした微妙な対比にも、当てはまるのではないだろうか。ふたりの人物の対象性のなかに運命の女神による人生の盛衰がある。キャリアは、人気女優の「鉄道」に乗車してスターダムへの花道を「先に、先に」前進できるが、ハーストウッドは、「鉄道」に乗りながら、ジレンマの悪循環のなかで円を描きながら、ガス栓のつまみを回しては戻して、前進ができないまま、誰からも見守られることなく、もちろんキャリアにも知らされることなく、黒い船に乗せられて最後を終える。

## 注

使用したテキストは、Dreiser, Theodore. *Sister Carrie*.1900. New York: W・W・NORTON & COMPANY Second Edition,1991 引用の英語括弧は、同書の頁である。日本語は、拙訳による。

- 1 岩元巖『シオドア・ドライサーの世界—アメリカの現実 アメリカの夢』pp. 28-30.
- 2 ドライサーと鉄道のつながりを論じた論文に Elissa Gurman “‘Onward, Onward’ *Sister Carrie and the Railroad*”がある。この小説の機械論的な決定論に支配された登場人物に注目する。商品経済を変貌させる交通機関としての列車の道具としての役割を実証する論文である。Jennifer Travis, “Injury’s Accountant: Theodore Dreiser and the Railroad”では、『シスター・キャリア』以後のドライサーが神経衰弱症に苦しんだが、鉄道の仕事に従事することで、神経衰弱症を克服しようと試みる。ドライサー個人の探求をドライサー流

鉄道体験を取り上げて論じている。鉄道が20世紀初頭の米国で男性独特の痛みや怪我の意味を探求するのに役立つ点を議論している。Philipp Fisherの*Hard Facts*は、「鉄道」のテーマに注目した最初の評論である。『シスター・キャリー』の中の鉄道のイメージについて、いち早く着目した。

「鉄道」に関してドライサーは『欲望』三部作のなかで取り上げられてい『資本家』(1912)、『巨人』(1914)、『禁欲』(1947)の3部作のなかで19世紀後半のシカゴの都市交通システムを開発したチャールズ・タイソンの運命を描いている。小野清之『アメリカ鉄道物語』ではドライサーの三部作の鉄道に注目し、興味深い鉄道的な視点を強調する。

- 3 Richard Lehan, p.69.
- 4 Theodore Dreiser, *Sister Carrie*, The Pennsylvania Edition, p.558.
- 5 「アメリカ旅客鉄道史 序 アメリカ鉄道史の魅力」(www.usrail.jp) 並び Railroads In American, U.S.History (american-rails.com) を参照。
- 6 シカゴ、ノースショア&ミルウォーキー鉄道、「ノースショアライン」(American-rail.com/cnsm.html) を2021年2月14日アクセス参照。
- 7 Chicago North Shore & Milwaukee Rail Road (tmer.org/Milwaukee-streetcar-history/) 及び Encyclopedia of Milwaukee (emke.uwm.edu/entry/railroad-stations/) を2021年2月14日アクセス参照
- 8 Dreiser, NORTON edition, p.2.
- 9 Theodore Dreiser, *Sister Carrie*, The Pennsylvania Edition, p.558.
- 10 Theodore Dreiser, *Sister Carrie*, The Pennsylvania Edition, p.558.
- 11 ヴォルフガング・シベルプシュ『鉄道旅行の歴史』p.11.
- 12 Lynne Kirby, *Parallel Track* p.201. 米国では、科学技術の発展と共に歴史的に鉄道の発達と初期映画の登場との相関関係が指摘される。
- 13 Dreiser, NORTON edition, p.11.
- 14 ニューヨークに乗り入れる蒸気機関車がニューヨーク・セントラル鉄道を当時走る (<https://www.britannica.com/topic/New-York-Central-Railroad-Company>)。2021年2月14日アクセス参照
- 15 ヴォルフガング・シベルプシュ『鉄道旅行の歴史』p.115.
- 16 Theodore Dreiser, *Sister Carrie*, The Pennsylvania Edition, p.571. ブルックリン路面電車のストライキは1895年1月14日に発生。当時記者だった作者はこの事件をニューヨークタイムズの記事を読んで知っていた。
- 17 1897年のブルックリン路面電車の写真 (<https://www.pinterest.jp/pin/90001692539927281/>)
- 18 Elissa Gurman, p.209.
- 19 Elissa Gurman pp.209- 210.

## 参考文献

- Dreiser, Theodore. *Sister Carrie*, Philadelphia, the University of Pennsylvania Press, 1981.
- , *Sister Carrie*, Second Edition, New York: W.W. Norton & Company, 1991.
- Fisher, Philip. *Hard Facts*, New York: Oxford University, 1987.
- Gurman, Elissa. "Onward, onward" : *Sister Carrie* and the Railroad, *Canadian Review of American Studies*, Volume 47, Number 2, Summer 2017, University of Toronto Press, pp.199-218.
- Lehan, Richard. *Sister Carrie: The City, the Self, and the Modes of Narrative Discourse*, New Essays on *Sister Carrie*, Cambridge University Press, 1991.
- Kirby, Lynne. *Parallel Tracks*, Exeter: University of Exeter Press, 1997.
- Travis, Jennifer. Injury's Accountant: Theodore Dreiser and the Railroad, *Studies in American Naturalism*, Vol.3, No.1(Summer 2008), University of Nebraska Press. pp.42-59.
- , *Danger and Vulnerability in Nineteenth-Century American Literature*, Lanham, Lexington Books, 2018.
- 岩元巖 『シオドア・ドライサーの世界—アメリカの現実 アメリカの夢』 成美堂、2007年。
- 小野清之 『アメリカ鉄道物語』 研究社出版、1999年。
- 原武史 『思索の源泉としての鉄道』 講談社、2014年。
- ヴォルフガング・シベルプシュ 『鉄道旅行の歴史』 加藤二郎訳 法政大学出版局、1982年。
- セオドア・ドライサー 『シスター・キャリー』(上)(下) 村山淳彦訳 岩波書店、1997年。